

## 教職大学院における離島実習の在り方に関する一考察

山 元 卓 也 [鹿児島大学教育学系（教職大学院）]

奥 山 茂 樹 [鹿児島大学教育学系（教職大学院）]

Considerations on the status of remote island practical training within teacher education at university graduate schools.

YAMAMOTO Tatsuya and OKUYAMA Shigeki

キーワード：教職大学院、離島実習、離島へき地、重点領域実践実習

### 1. はじめに

本学は、平成 29 年 4 月に鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻（以下、本学教職大学院）を開設した。定員は 16 名であるが、開設年次は院生 12 名（学部新卒学生 2 名と現職教員学生 10 名）でスタートし、平成 30 年度は 16 名（学部新卒学生 6 名と現職教員学生 10 名）、現在は 13 名（学部新卒学生 4 名と現職教員学生 9 名）が学んでいる。

本学教職大学院で育成しようとする人材像は、①新たな学校づくりの有力な一員となり得る新任教員と②地域や学校で指導的役割を果たし得る中核的教員であり、それを実現するためのカリキュラムの特色の 1 つに「実習科目を核とした共通科目、選択科目の連動」を挙げている。4 学期制を活かし、カリキュラムの中で「実習」と「共通科目」、「実習」と「選択科目」の随時の往還を実現している。つまり、本学教職大学院の学生は 1 年次から多様な「実習」を体験し、理論から実践へといった一方向的にではなく、円循環的に学びを深めている。

実習科目は、特徴的な 3 つの全く異なるスタイルの実習（高度化実践実習、重点領域実践実習、開発実践演習）から構成されているが、その中でも重点領域実践実習Ⅰは、本学教職大学院の実習科目のもっとも特徴的なものであり、鹿児島県の教育現場のニーズに呼応し、離島へき地等の実習を必修化するものである。これは、鹿児島県の全小中学校の 4 割以上が離島へき地に設置されており、複式学級を設置している学校の割合も半数近くを占め、その比率は全国一となっている状況から複式指導や少人数指導における課題解決が望まれていることによるものである。実習校については、平成 29 年度は本県の硫黄島にある三島村立三島小・中学校を実習校とし、平成 30 年度は本県獅子島にある長島町立獅子島小・中学校を実習校とした。両校とも小中併設校で小中一貫教育に取り組んでいる学校である。本稿では平成 29 年度、30 年度に行った重点領域実践実習Ⅰの取組を振り返りつつ、院生にとって重点領域実践実習Ⅰがどのような学びにつながっていったのかを述べてみたい。

## 2. 重点領域実践実習Ⅰの概要

本実習は、鹿児島県の教師に、重点的に求められる教育実践力の獲得を目的として、1週間の離島域やへき地域(小規模校)にて実習や探究を行うものである。1年次後期に行う必修科目として、1週間の実習と事前・事後指導で構成されている。現職教員学生と学部新卒学生は協働して離島やへき地域(小規模校)の教育課題の分析を行い、連携協力校との事前協議の上、少人数指導や複式指導による授業等の困難な点やその改善方策の検討を行っていく。具体的には実習中、学部新卒学生においては、複式指導・小規模学級の授業観察や補助を中心に行い、現職教員学生においては、小規模校の学校経営や複式指導法等について研究協力校の教員と協働して研究・開発を行っていく。この実習を通して、離島域やへき地域(小規模校)の環境を生かした実践力(授業構想力)を獲得することもねらいとしている。なお、本実習は、教職大学院における必修科目(特に第2領域の「授業研究の実践と課題」、第4領域の「学級経営の実践と課題」、「自律的学校経営の理論と実践」、第5領域の「鹿児島における学校教育と教員のあり方」)、選択科目では特に、「人口減少社会でのICT活用の役割」(指導法深化科目)、「初等・中等教育における協働的指導法開発」(指導法深化科目)との関連も図っている。また、リフレクション科目である「教職課題研究Ⅰ」と関連しながら、課題の設定や活動のまとめを行っている。

本実習における、学部新卒学生と現職教員学生の学びの到達目標は以下のとおりである。

〔学部新卒学生、現職教員学生共通〕

- ・授業や指導レベルにおいて、複式指導や離島・へき地域での教育課題発見と改善方策を検討できる。

〔主として現職教員学生〕

- ・組織的業務レベルにおいて、複式指導や離島・へき地域での教育課題発見と改善方策を具体的に提案できる。

## 3. 三島小・中学校における実習の主な内容

平成29年10月10日～14日の期間に院生12名(現職教員学生10名と学部新卒学生2名)と引率教員4名が現地に赴き実習に参加した。実習校の状況は以下のとおりである。

- ・三島小学校：3学級、在籍児童数は18名、教員数4名
- ・三島中学校：3学級、在籍生徒数は4名、教員数5名

実習の事前活動としては、前期の選択科目「人口減少社会でのICT活用の役割」において、三島小・中学校とテレビ会議システムでつなぎ、三島小・中学校の児童生徒に対して遠隔授業を実施している。その授業の中での児童生徒との関わりを通して、児童生徒の実態把握や関係づくりが可能となっている。また、三島小・中学校の教員とも授業の事前打合せを複数回重ねることにより、教員間の連携も深まっていた。

### 3.1 実習の日程

実習校への移動にはフェリーで片道約4時間を要し、フェリーの出港日も限られる中での期間設

定となるため、実習期間は4泊5日となった。実習期間中の日程は表1のとおりである。

表1 実習期間中の日程

時刻/日	10日(火)	11日(水)	12日(木)	13日(金)	14日(土)
8:15 ～8:35		奉仕活動 大学院間朝打合せ	奉仕活動 大学院間朝打合せ	奉仕活動 大学院間朝打合せ	
1限	9:30鹿児島港発  船内ミーティング  13:30硫黄島港着	校長講話	協働授業・授業参観		お別れ会
2限		協働授業・授業参観			10:00硫黄島港発  フェリーみしま  14:05鹿児島港着
3限		協働授業・授業参観			
4限		協働授業・授業参観			
12:35～		給食・休憩(学校の作業時間は13:40～13:55)			
5限	オリエンテーション	協働授業・授業参観			
6限		環境調査 (実地観察)	協働授業・授業参観		
16:00～			合同校内研修	省察タイム	省察タイム
				職員・地域住民との 情報交換会	

### 3.2 合同校内研修

三島小・中学校に到着した日の放課後に、当該校の校内研究テーマ「表現力の育成」の仮説を実証するための研究授業（小学校3、4年複式 国語）の指導案検討を行った。大学とはテレビ会議システムで接続し、大学教員が校内研修における院生の関わりや指導案検討について観察できるようにした。

教職大学院生の関わりとしては、本研究授業の前時と前々時にあたる授業を教職大学院生が三島小・中学校の教諭と協働で行うことになっており、より指導案検討の必要性を感じながら参画していた。また、中学校国語担当の現職院生による専門的な意見も三島小・中学校の先生方には非常に参考となっているようであった。検討を行った授業の単元、教材等は以下のとおりである。

・単元 3年生：場面のうつりかわりをとらえて、感想をまとめよう

4年生：読んで考えたことを話し合おう

・教材 3年生：「ちいちゃんのかげおくり」（光村3年下） 4年生：「ごんぎつね」（光村4年下）

今回の合同校内研修においては、三島小・中学校の校内研究テーマをもとに指導案検討を行ったため、より学校や児童の実態を踏まえた検討がなされ、院生にとっても児童の実態をより理解するいい機会となっていた。また、ほとんどの院生が、これまで複式指導の経験がなく、複式指導におけるきめ細かな配慮が行き届いた指導案に感心している様子であった。

### 3.3 三島小・中学校教員との協働授業

本実習においては、学生のこれまでのキャリアに応じて、三島小・中学校の教諭との協働授業を実施することにした。関わり方については、三島小・中学校の教諭とティーム・ティーチング（以下TTとする）のスタイルをとるようにし、学部新卒学生はT2、現職教員はT1またはT2として授業を行うことを基本とした。学部新卒学生については、授業経験も学部実習のみであったため、授業参観が中心となった。現職教員学生10名（A～J）の協働授業の実施状況は表2のとおりである。

表2 院生の協働授業実施状況

院生	日時	校種・学年・教科	日時	校種・学年・教科
A	11日2限	中学2年 国語 T2	11日3限	中学2年 国語 T1
	12日2限	中学1年 国語 T1	12日4限	中学2年 国語 T2
	13日3限	中学2年 国語 T2	13日4限	中学3年 国語 T1
	13日5限	中学1年 国語 T1		
B	12日1限	中学3年 英語 T1	13日6限	中学2年 英語 T1
C	12日4限	中学1年 英語 T1	13日5限	小学5・6年複式 外国語 T1
D	11日4限	小学5・6年複式 社会T1	12日1限	小学5・6年複式 道徳 T1
	12日4限	小学5・6年複式 社会T2		
E	12日3限	小学3・4年複式 算数T1	12日4限	小学3・4年複式 社会T1
	13日2限	小学3・4年複式 算数T1	13日3限	小学3・4年複式 社会T1
F	12日2限	小学1・2年複式 算数T1	13日2限	小学1・2年複式 算数T1
G	12日4限	小学5・6年複式 社会T1	13日6限	小学5・6年合同 体育T1
H	12日2限	小学3・4年複式 国語T1	13日1限	小学3・4年複式 国語T1
I	11日2限	小学1・2年複式 国語T1	13日3限	小学1・2年複式 国語T1
J	11日5限	小学1・2年合同 体育T1	12日5限	小学1・2年合同 体育T1
	13日4限	小学1・2年複式 算数T1		

### 3.3.1 小学校複式指導における実践

小学校の現職教員学生7名のうち複式指導の経験者は2名のみで、院生のほとんどが複式指導について多くの不安を持っていたこともあり、複式指導に関する資料収集や指導案の作成など事前の準備も積極的であった。複式指導の経験がある院生の中には、複式指導の充実を探究課題とし、充実を図るためには「問題解決学習の学習過程を繰り返し指導し、見通しを持った学習の習慣づけとガイド育成が重要である」とことと「間接指導の充実のために、ワークシートの活用や学習のねらいに迫る学習活動を取り入れることも有効である」とことを感じ取っていた。また、複式指導の経験のない院生においては、三島小・中学校の教諭から学ぶことが多く、「わたり」や「ずらし」といった特徴的な動きや間接指導、直接指導の実際を具体的に学べたことに充実感を得ていた。さらに、三島小・中学校の教諭にとっても、改めて自身の指導法を見つめ直す良い機会となっていた。

小学校5・6年単式の体育の授業を行った院生は、児童にタブレットPCでお互いに跳び箱を跳ぶ様子を撮影させ、その動画をもとに意見交換をさせながら練習のポイントを明確にさせるなどICTの活用にも積極的に取り組んでいた。参観した他の院生や三島小・中学校の教諭からも有効であるといった評価を得ていた。

### 3.3.2 中学校複式指導における実践

中学校の現職教員学生3名は、三島小・中学校のような極小規模校での勤務経験はなく、生徒の実態に基づいた少人数指導の在り方については共通した課題意識を持っていた。

英語の授業を行った院生は、三島小・中学校の英語担当教諭の授業参観をとおして、生徒一人に対してオールイングリッシュで双方向の授業が展開されていたことやデジタル教科書を効果的に活用していたことが参考となっていた。授業実施後、1対1の授業でいかに生徒のモチベーションを上げるか、多様な考えを持たせるかが課題となっているようであった。

国語の授業においては、三島小・中学校の担当教諭が専門教科外であることから、学習指導について専門的な視点から研修を深めたいといった意欲もあり、院生の探究課題の一つとして「教科指導における教師の成長を促す支援の在り方」を設定していた。実習の事前準備の段階から院生が中心となって指導案等の作成支援を行い、実習においても、実習校の教員が日頃指導に難しさを感じている古典、文法指導の授業を参観しながら、多くの疑問に答えていた。少人数指導における学びの可能性を1対1の授業場面で追究するという院生のメリットと教科指導の専門性を深めるという三島小・中学校の教諭のメリットが双方に働いた実習となり、教員研修の在り方を考える一つのきっかけの可能性を感じた。

### 3.4 テレビ会議システムを用いた省察

本実習においては、大学教員による引率は4人であったため、教職大学院教員スタッフ全員で院生の学びを共有するためにテレビ会議システムを用いて、院生が一人ずつ大学にいる教員に1日の実践と感想を報告することにした。

大学にいる教員からは、「複式指導の課題や可能性、困難さの中心になっている間接指導の在り方等を直接見て、感じ取りながら追究してほしい」、「極小規模校においては子供の多様な意見を生み出しにくい状況を緩和するためには、子供と関わる教師が多様な他者の役割を果たすことになるだろう」といった探究を深める視点の助言等があった。加えて引率教員からは具体的な実践場面における気付き等のコメントもあり、院生は省察を深めることができていたようであった。

実践と省察の記録は、放課後や宿舎に戻ってからの時間を使い、大学から持参したノートパソコンとLTEルーターを使い、デジタルポートフォリオに入力し、実習での学びの蓄積が今後の学修に活用できるようにした。

### 3.5 校長講話、地域環境調査

本実習の目標は、複式指導や離島・へき地域での教育課題の発見と改善方策の検討について、授業や指導レベルと組織的業務レベルの2つの側面から設定している。組織的業務レベルからのアプローチとして、実習の前半で三島小・中学校長から「離島小規模校における教育について」と題して、三島村・硫黄島、学校の概要・特色、教育活動について講話をいただいた。島内にある一つの極小規模校で小中併設校である特性をどう生かすかについてメリット、デメリットを踏まえた様々な取組の具体を聞くことができた。院生の中には、この学校と児童生徒が地域に果たす役割の大きさを実感し、これまで、「地域と学校の連携は重要である」と分かりきったつもりで使ってきた一文を改めて、自身の勤務校に当てはめて改善すべき点を見い出していた。

校長講話の後に、保護者や三島村教育委員会の協力も得て地域環境の实地調査を行った。人的・物的資源を生かした特色ある教育活動を行う上でのビジョンの一つが「硫黄島や三島村を誇りに思う児童・生徒になってほしい」というものであることを校長講話で知り、地域環境を知ることの必然性は高まっていた。院生の中には、社会科の授業実践で地域素材の教材化に取り組んだ者もあり、实地調査で得た情報をもとに協働授業をする三島小学校の教諭と授業構想の検討を行っていた。

表3 実習期間中の日程

時刻/日	22日(月)	23日(火)	24日(水)	25日(木)	26日(金)
8:15～	8:00大学発   11:45学校着	職員朝会参加	教職大学院打合せ・朝の活動参加		お別れ会
1限		協働授業・授業参観			
2限		協働授業・授業参観			
3限		実地研修	協働授業・授業参観		10:30学校発
4限			協働授業・授業参観		
12:20～	給食・作業指導 休憩				
5限	生徒会役員 選挙参観	協働授業・授業参観		長島町 複式・小規模校 研究会	
6限	校長講話	協働授業・ 授業参観	教務・研修・生徒指 導担当による 講話及び情報交換		
15:55～	校内研修 職員との打合せ	省察タイム	公開準備	職員・地域住民との 情報交換会	

#### 4. 獅子島小・中学校における実習の主な内容

平成30年10月22日～26日の期間に院生16名（現職教員学生10名と学部新卒学生6名）と引率教員3名が現地に赴き実習に参加した。実習校の状況は以下のとおりである。

- ・獅子島小学校：5学級、在籍児童数は32名、教員数9名
- ・獅子島中学校：3学級、在籍生徒数は11名、教員数8名

実習の事前活動としては、前期の選択科目「初等中等教育における協働的指導法開発」において、獅子島小・中学校と連携をとり、授業づくりや事前調査を含めた学校訪問を行っている。訪問の際に児童生徒や職員と関わる時間を取り、児童生徒の実態把握にも努めている。また、獅子島小中学校の教員（協働授業者）とも個別に事前打合を複数回重ねてきた。

##### 4.1 実習の日程

実習校への移動については、大学から港までバスで2.5時間、フェリーで20分を要し、実習期間は4泊5日となった。事前に学校訪問を行っているため、オリエンテーション等は行わずに実習にスムーズに取り組むことができた。実習期間中の日程は表3のとおりである。

##### 4.2 獅子島小・中学校教員との協働授業

獅子島小・中学校は、施設一体型の小中一貫校として開校し6年を迎えている。実習中の協働授業については、離島の小規模小中一貫校の特性を生かした授業づくりに院生と獅子島小・中学校の職員が協働で取り組んでいくことをねらいとした。特に現職教員院生においては、これまで経験のない複式学級の授業に取り組んだり、自身の勤務校種に拘らず敢えて他校種の授業に取り組んだりするなど個々の課題にそった積極的な実践が顕著であった。学部新卒学生においては、授業参観を中心にしながらもT2として、獅子島小・中の職員との協働及び現職教員学生との協働授業にも取り組んだ。

現職教員学生（K～T）10名と学部卒院生（U～Z）6名の実施状況は表4のとおりである。

表 4 院生の協働授業実施状況

院生	日時	学年（学級）・教科	日時	校種・学年・教科
K	23日 2 限	1 年 国語 T1	24日 5 限	1 年 体育 T2
	23日 5 限	1 年 学活 T2	25日 3 限	1 年 算数 T2
	24日 1 限	1 年 国語 T1		
L	24日 3 限	5・6複式 社会T2	25日 3 限	5・6複式 社会T2
	24日 4 限	5・6複式 社会T2		
M	24日 3 限	3・4複式 国語T1		
N	23日 5 限	3・4合同 体育T2	25日 2 限	3・4合同 体育T1
	24日 5 限	1・2合同 体育T1		
O	23日 1 限	5・6複式 算数T2	25日 1 限	5・6複式 算数T1
	24日 1 限	5・6複式 算数T1	25日 2 限	5・6複式 国語T2
	24日 2 限	3・4複式 算数T2	26日 1 限	5・6複式 国語T2
P	24日 3 限	9 年単式 社会T1	25日 3 限	7 年単式 社会T1
	24日 4 限	5・6複式 社会T1		
Q	24日 2 限	しおかぜ 算数T1	25日 1 限	しおかぜ 国語T1
	24日 3 限	しおかぜ 国語T2	26日 1 限	しおかぜ 算数T2
R	23日 2 限	8 年単式 英語T2	24日 4 限	9 年単式 英語T2
	24日 2 限	7 年単式 英語T1	25日 1 限	7 年単式 英語T1
	24日 3 限	あおぞら 英語T2	26日 1 限	7 年単式 英語T2
S	23日 5 限	5・6複式 理科T1		
T	25日 1 限	7・8・9年 道德		
U	23日 2 限	1 年 国語 T2	25日 1 限	1 年 国語 T1
	24日 1 限	1 年 国語 T2	26日 1 限	1 年 国語 T2
V	24日 2 限	2 年 図工 T2	24日 4 限	2 年 算数 T2
	24日 3 限	2 年 図工 T2	25日 3 限	2 年 算数 T2
W	24日 2 限	3・4複式 算数T2	26日 1 限	3・4複式 算数T2
	25日 1 限	3・4複式 算数T1		
X	24日 1 限	5・6複式 算数T2	25日 1 限	5・6複式 算数T2
Y	24日 3 限	9 年単式 社会T2	24日 4 限	5・6複式 社会T2
	25日 3 限	7 年単式 社会T2		
Z	24日 3 限	9 年単式 社会T2	24日 4 限	5・6複式 社会T2
	25日 3 限	7 年単式 社会T2		

小学校の複式指導に初めて取り組んだ中学校籍の現職教員学生は、小学生の発達段階の理解が不十分で予想以上のつまずきが見られ、実態把握の重要性を改めて感じるとともに、複式指導の困難さや課題を痛感している様子であった。また、小中一貫校の特色を生かした校種を交えた授業の実践は、小学校の学びをつなげたり、小中学校の段差を解消したりする視点からは、意味のある取組であるが、単元を見通して身に付けさせたい知識の構築や見方・考え方を働かせる点では、さらなる教材研究の必要性があることも感じているようであった。さらに、獅子島小・中学校の勤務経験の少ない職員との協働授業においては、院生自身の主たる研究教科の専門性を生かした助言的な関わりも見られ、相互に授業づくりの意欲化につながっていた。学部新卒院生の授業への参画は T2 として補助的に関わる機会が多く、当初は T1 の教師が授業を進める中で、T2 として授業が円滑に進むためにどのように動けばよいのか戸惑っている様子であったが、子供の学びに着目しながら一緒に子供を支援していく意識に変わっている様子であった。また、授業の具体だけではなく、協働で授業をつくることを通して、現職教員学生と獅子島小・中学校の職員との関わり方や互いに学ぶ姿

勢についても共感している様子であった。

### 4.3 研究公開への参画

当該実習校の設置者である長島町教育委員会では、毎年複式・小規模校教育研究会を主催しており、平成30年度は獅子島小学校が研究公開校となっていた。また、その研究公開と合わせて、獅子島中学校としては「主体的・対話的で深い学び」の実現による学力向上プログラム授業公開を実施することにし、2つの公開の主旨を踏まえ小中一貫校としての研究主題を「学びを深め合う子供の育成ー9ヵ年を見通した『学びの獅子島スタイル』の充実」と掲げ研究公開を実施した。その全体研究公開に院生も一部関わりながら、より実践的な研究会の運営や獅子島小中学校が目指している子供の学びに着目した授業づくりについて学ぶことをねらいとした。小学校、中学校でそれぞれの研究テーマも設定され、小学校の3、4年複式学級での国語と中学2年生の数学の公開授業において、院生がそれぞれ授業記録等の担当として関わった。さらに、授業研究テーマを「“子供の姿に学び合う場”としての授業研究の進め方」とし、授業記録をもとにした授業研究に参画した。

院生はこれまで、必修科目「授業研究の実践と課題」を中心に子供の姿に学ぶ授業研究について学修しており、その具体を本実習の中で経験できたことにより、実践の難しさを感じるとともに、黙って活動できない児童をどのように見とるのかなどの課題が具体的に表出していた。

## 5 総括レポートから見てくること

重点領域実践実習Ⅰ終了後に実習を終えての所感と各自の探究課題に対する考察、教育課題に対する改善方策等について自由記述してもらい、総括レポートとして提出を求めた。その記述内容についてテキストマイニングを用いて、その特徴や傾向を捉えることとした。分析の対象となった総括レポートは、三島小・中学校での実習を行った院生の12名分と獅子島小中学校での実習を行った院生16名のうち15名分である。今回テキストマイニングに用いたソフトウェアは「kh-corder」(注)と呼ばれるフリーウェアである。

### 5.1 三島小・中学校を実習校とした院生の総括レポートから

三島小・中学校を実習校とした院生は先に述べたとおり、12名が総括レポートを提出しており、1レポートの総文字数の平均値は2826文字であった。頻出単語の上位30番目までを表5に示す。また、このデータをもとに算出した共起ネットワーク図を図1に示す。最も出現回数が多い「授業」という単語のコロケーションを算出してみると、「複式」「参観」「デザイン」「行う」等の抽出語が高いスコアを示した。これは、三島小・中学校の教員と協働で授業を実施したり、授業参観を行ったりすることが、実習の中心であったことによるものであり、特に複式指導に初めて取り組んだ現職教員学生は、共起ネットワーク図から観察される「地域」「学校」「行う」「活動」のグループは、三島小・中学校の環境的な側面の特徴が表れている。例えば、歴史的、自然環境的な地域素材や地域住民と子供、学校と地域と密接な関係についての記述が見られた。学校と地域の密接な関わりは、離島へき地域ならではの特色であることはよく言われており、イメージとして理解されていることであるが、記述内容から院生の多くがこのことを肌で実感できていることが見て取れる。



表5 抽出語の出現回数

(三島小中学校を実習校とした院生の総括レポート)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 授業	169	16 活動	49
2 指導	125	17 課題	47
3 子供	103	18 先生	45
4 学校	91	19 小中学校	44
5 行う	86	20 学び	42
6 地域	82	21 思う	40
7 学習	81	22 実習	37
8 感じる	80	23 自分	33
9 生徒	79	24 見る	31
10 複式	71	25 学級	30
11 教育	66	26 体験	20
12 考える	62	27 島	20
13 教師	60	28 間接	19
14 児童	56	29 関係	18
15 学ぶ	50	30 少人数	18

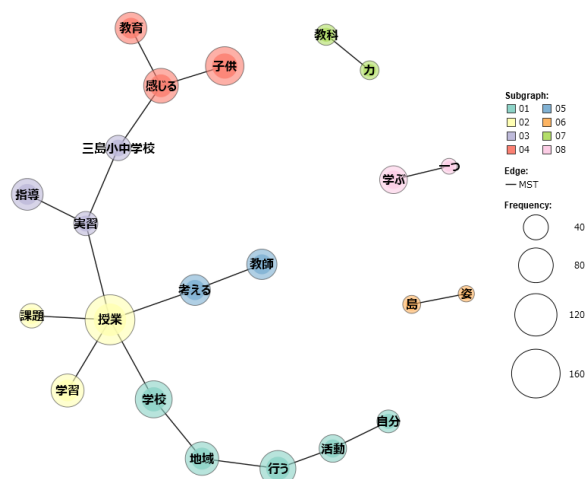


図1 共起ネットワーク

(三島小中学校を実習校とした院生の総括レポート)

## 5.2 獅子島小中学校を実習校とした院生の総括レポートから

獅子島小中学校を実習校とした院生は先に述べたとおり、15名が総括レポートを提出しており、1レポートの総文字数の平均値は2279文字であった。頻出単語の上位30番目までを表6に示す。また、このデータをもとに算出した共起ネットワーク図を図2に示す。先に述べた三島小・中学校を実習校とした院生の総括レポートと同様に、「授業」を中心とした記述が多く見られ、各自が行った授業実践や授業参観の具体が示されていた。「教育」という単語のコロケーションを算出してみると、「課題」「活動」「へき地」「小中一貫」抽出語が高いスコアを示した。特に小中一貫教育に関しては、獅子島小中学校の特色の一つであり、その教育的効果と課題について言及している院生も見

表6 抽出語の出現回数

(獅子島小中学校を実習校とした院生の総括レポート)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
1 授業	247	16 地域	44
2 子供	155	17 交流	43
3 考える	125	18 自分	42
4 指導	123	19 中学校	42
5 行う	100	20 教師	37
6 先生	80	21 今回	37
7 学習	79	22 支援	36
8 課題	73	23 活動	35
9 思う	69	24 必要	34
10 学校	61	25 考え	33
11 教育	59	26 小学校	32
12 学級	56	27 内容	32
13 見る	48	28 担任	31
14 実習	47	29 実態	29
15 感じる	45	30 難しい	29

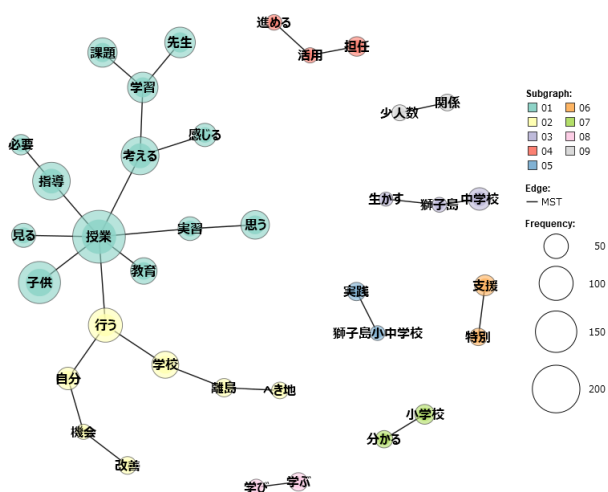


図2 共起ネットワーク

(獅子島小中学校を実習校とした院生の総括レポート)

られた。また、図2を概観すると「小学校」と「中学校」がそれぞれ別のグループに現れており、小中連携について、院生自身の在籍校種の立場から、各校種の担当教師の良さ、強みを感じ取った

ことや、校種を超えた乗り入れ授業の効果や課題の気付きについての記述が見られた。

## 6. おわりに

### 6.1 成果

院生の総括レポートを概観すると、離島小規模校での利点として、一人一人の子供の状況が把握しやすく、きめ細やかな指導ができるなどの少人数を生かした指導ができることなどを実感している。一方で、多様な考えに触れる機会や切磋琢磨する教育活動が少なくなりやすい、人間関係や相互の評価等が固定化しやすい、複式指導の難しさ、教職員配置等教育環境の整備等については課題として挙げられ、これらに対する改善策について考えるよい機会となった。また、本実習の特色の一つとしては、宿泊を伴う実習であることが挙げられる。短い期間ではあるが、寝食を共にすることによる互いの理解が深まり、院生同士の同僚性が高まったことは、実習終了後の講義の学びの姿として表出していることを多くの大学教員スタッフが感じ取っていた。院生同士もそのことを感じ取り、このことを踏まえ、地域や保護者と学校、教員同士の「協働」というキーワードの重要性をあらためて実感できたことも大きな成果の一つと考えたい。

### 6.2 課題

重点領域実践実習Ⅰを実施するにあたっては、前年度から実習校の選定、実習校とその所管である教育委員会との打合せ等を行い、共通理解を図った上で実施してきた。実習校にあっては、受入に対する理解と地域をあげての協力のおかげで、本実習がスムーズに実施できたと感じている。一方で課題としては事前指導の在り方が挙げられる。これまで、事前指導として教職課題研究Ⅰの2コマを設定し、協働授業の設計等については関連する選択科目で対応してきたが、基本的には院生各自が実習校の教員と連絡を取り合い、授業設計に取り組んでいる状況であった。今後は事前活動、事前指導の時間の確保と必修科目との関連を図った指導の充実が必要であると考えられる。

### 6.3 今後の展望

令和元年度の重点領域実践実習Ⅰについては、本学教職大学院の改組に伴う定員増が見込まれることも考慮し、本稿で述べた2つの実習校に分かれて同時期に実施することになっている。各実習校の特色を生かしながら、重点領域実践実習Ⅰとしてのねらいの達成を目指し、院生のこれまでの経験や実績に基づいた探究課題への対応が可能になるのではないかと期待している。

注 KH コーダーは、樋口耕一（『社会調査のための計量テキスト分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版、2015）に基づく。<https://kncoder.net/>よりダウンロード（2019年7月30日取得）

## 引用文献

平成29年度教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業（A教職大学院等研修プログラム開発事業）教職大学院での学びを学校・地域に普及させるハイブリッド型養成・研修プログラム開発成果報告書